

和解の奉仕者

メリー・F・スマイス

日本派遣宣教師

メリー・フレッチャー・スマイス物語



レーチェル・ヘンダーライト著

1950

(翻訳と解説)

レーチェル・ヘンダーライト著
『和解の奉仕者：メリー・F・スマイス』

Translation and Commentary:

*Minister of Reconciliation: The Story of Mary Fletcher Smythe,
Missionary to Japan* by Rachel Henderlite.

楚 輪 松 人*

SOWA Matsuto

キーワード：①金城学院 ②日本派遣宣教師 ③メリー・F・スマイス
④レーチェル・ヘンダーライト ⑤スケッチ（人物伝）

要旨

金城学院創立130周年・金城学院大学設立70周年を記念する紀要（第23号）への寄稿として、これまで未邦訳であった“金城学院の母”メリー・F・スマイスに関する小冊子（人物伝）を全訳し、解説と参考文献を付したものである。解説ではスケッチの著者レーチェル・ヘンダーライトについての簡単な説明と金城学院の創立記念日を伝える有益な2枚の写真を掲載する。

* 金城学院大学文学部教授，キリスト教文化研究所所長

[翻訳]

和解の奉仕者 メリー・F・スマイス

これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。

(コリントの信徒への手紙二 5:18)

「それはわたしだけができることでした」。和解の奉仕者、L. C. M. スマイス夫人は、そう言いました。今秋、彼女と二人で、バージニア州リッチモンドにあるわたしの家の居間に座って、南長老ミッションの宣教師としての彼女の日本での働きについて話していた時のことです。

宣教師の仕事は和解のための仕事であり、自由になるすべての手段を通して行われる仕事です。自分自身が神と和解し、和解のために奉仕する任務を委ねられる時、自分が持っているものやその行動のすべてが「キリストの使者」[コリントの信徒への手紙二 5:20：訳者注]として働くため道具になるかもしれないことを知るからです。人々をキリストに導く仕事は生涯の仕事になり、そして人と人との和解は神と人との和解という根本的な和解をもたらす結果です。スマイス夫人が、主から受けた賜物であるが故、また主の御用のために用いられるようにと彼女が主に明け渡した賜物であるが故に、スマイス夫人だけができたことがありました。

驚くほど多くのことが山積していました——貧困と戦争によって壊滅的打撃を受けて奮闘努力する小さなバプテスト教会のための聖餐式用の杯の提供。すぐれた女子教育を行うクリスチャン・スクールの教育政策を形成するための支援。結核の子どもを持つ母親たちのための粉ミルクの配給。銀行員、工場労働者、学校の生徒や教師のための善意のメッセージを書いたクリスマスカードの配布。両親を亡くした女子のために親代わりとなっ

てクリスチャンの配偶者を見つけてやること。奮闘努力している新しい教会の幼稚園建設の監督業務。空襲で大きな被害を受けた駅で生活している孤児の少年たちを集めること。日本で三番目に大きい都市、名古屋でのロータリー・クラブで、彼女の表現を使えば、「為になる分かりやすいキリスト教の話」をすること。その他、色々です。

わたしは、名古屋の金城女子専門学校の客員教員として、米国南長老教会の世界宣教委員会の招聘で、日本に1年間滞在しました〔正式には1950年9月から翌年7月まで11ヶ月：訳者注〕。そして幸いにも住まいは名古屋にある美しいスマイス夫人のお宅に同居することを割り当てられました。それは、わたしが人生で初めて、ミッションを明確に見た時、キリストのことをあづかり知らない人々の空虚、貧困、勇気、そして絶望の中での「キリストの使者」の生活を見た年でした。どれほど深く、誠実に、イエス・キリストに献身した人が他国の人々のために奉仕するかを深い満足感をもって見たのです。

メリー・フレッチャー・スマイスの生涯の物語はそのような人物の物語です。41年の間、日本へ派遣された宣教師として、彼女は教会の宣教運動を映し出す鏡としての働きをしています。教会の使命が和解のために奉仕する任務だと言うことができるならば——わたしたちはそう言うことができるし、またそうでなければならぬのですが——、おそらくわたしたちはこの一人の人物の生涯の中に、幾多の種類 of 和解の肖像画を見ることができます。そして、和解とは、今日の世界にもたらすことのできる、またもたらされなければならないものであり、人々がイエス・キリストの教会の課題に献身して初めてもたらされるものなのです。

教会の使命は、確かに和解のために奉仕することです。教会は、主の和解をもたらす愛の証人として、また全世界に派遣された「和解の使者」として、神によって世界に置かれました。教会の宣教師の活動は、教会がこの神が与えた使命を受け入れること、そして、その使命を最大限に遂行し

ようとする試みです。その成功の尺度は統計によって測ることはできません。実際、成功を測ることは人間の特権ではありません。人々は従うように召され、従順や不従順の結果は神のみが知ることで。しかし、キリスト教用語である「宣教」や「和解」を、具体的な人間の状況に翻訳し、一人の人物の生涯の中に見るならば、教会の全仕事により明らかな言葉で表現されることになるでしょう。

スマイス夫人の直面した状況は、その多くが教会が世界の地の果てに向かって拡大するに従って、絶えず直面する状況の典型です。彼女が日本で遭遇した問題は、わたしたちの代理者として世界に派遣されているすべての宣教師たちが世界各地で他の人々の間にあって遭遇している問題です。これらの諸問題に対して彼女が与えた答えを深く考えることは、海外での奉仕生活を楽しみにしている若き宣教師にとって、また、わたしたちの、あるいは異教の国々にある教会を代表するすべての者にとって、助けとなるでしょう。わたしたちが「使命」と「教会」を切り離し、和解の奉仕は前者に属するものであって、後者に属するものではないと想定する時、間違いなく間違いを犯すことになります。彼女の生涯の豊かな実りと、彼女が残したさまざまな方法を理解することは、本国にしようと、外国にしようと、多くの若い人たちに、そのような和解の奉仕のために人生を用いようと奮い立たせるかもしれません。

以下に記すのはメリー・スマイスの生涯に反映された教会の宣教についてのいくつかの側面です。

1. 文化的背景を異にする人々同士の和解

スマイス夫人の宣教活動の中で最も明白な側面は、その国民的な文化背景が大いに異なる人々同士の和解でした。日本とアメリカは多くの重要な点で非常に異なっています。そしてそこに誘惑が常にあるのです——特に、アメリカ式のやり方こそ本当に唯一の文明化されたやり方であると確信し

ているアメリカ人にとって——正しく評価するのではなく、好奇の眼差しで他者の文化を見てしまうという誘惑が潜んでいるのです。スマイス夫人は決してそうではありませんでした。日本で、アメリカ人と日本人の間に交じって、彼女は彼女独自のやり方で、東洋から西洋への、また西洋から東洋への通訳者として奉仕することができました。また心からそうすることを彼女は喜んだのです。

日本は長い伝統を持つ国です。うっとりするような木版画、魅力的な伝説、そしてまるで儀式のような生活様式は、コロンブスが希望を胸に抱いて香辛料を求めて世界中を航海していた時、偶然にアメリカの海岸を見つけた時よりもはるか何世紀も前にさかのぼります。日本人の繊細さ、生来の礼儀正しさは、アメリカ人をして、己の愛想のなさを、また自らを粗野で野蛮な人間のように思わせます。日本在中のせかせかした西洋人が鈍感で横柄な人間だと見られたくないのであれば、特別な注意が必要です。

わたし個人としては、スマイス夫人は、持ち前の豊かな感受性のおかげで、また他人の感情に敏感であったからこそ、あれほどたやすく日本社会に溶け込めたのかではないかと思います。彼女はバージニア州のイースタン・ショアと呼ばれる有名な地域に生まれ、チャールストンの古い一家に嫁ぎ、そして持ち前の上品さと控え目さを携えて日本にやって来たのです。おかげで彼女は日本人のやり方を手探りしながら前進し、同胞であるアメリカ人に対して、日本で見つけた美しさと可愛らしさのいくつかを通訳することができたのです。

繊細さと上品な真心。これらは最初から彼女の宣教の特徴でしたが、とりわけ張り詰めた戦後の数年間には重要なものでした。戦後、わたしが彼女を知ることになった頃でしたが、スマイス夫人は、占領軍と占領下の日本との間の架け橋となることが、宣教師として、自分の仕事のかなりの部分だと考えていました。ある時、彼女はわたしに言いました。「大佐の家族が日本人の家族と友だちになるのをお手伝いできるわ」。そんな日本人

家族を紹介して欲しいという申し出を受けて、彼女はすぐさま、その父親が何年も前に彼女の夫のスマイス氏の聖書研究会のメンバーであった高校生の男の子のことを思い浮かべました。その高校生自身も、父親によって彼女自身の聖書研究会に連れて来られていたのです。彼女はその男の子を通して、アメリカ人と日本人の二つの家族が互いを知るように手配しました。

彼らはそれぞれの家で互いをもてなし、それぞれ互いの習慣や異なる慣習を学ぶようになりました。そして相互理解と尊敬の念を伴った「水魚の交わり」を結ぶことになったのです。このようにして、教会がこの世に誕生した本来の目的を果たすような類の和解を実現したのです。「わたしは本当に多くのことをしました」とスマイス夫人は、ある夕方、わたしと話していた時に言いました。「わたしは自宅にアメリカ人の将校をもてなす時には、いつもその方と性分の合いそうな素敵で日本人男性を思い浮かべ、その方も同時に招待することにしています」

時には、この和解のための奉仕は、宣教師の活動において非常に実際的な効果をもたらし、日本在住のアメリカ人を日本の教会の働きに迎え入れることになりました。例えば、ミス・ゴボーニです。ミス・ゴボーニはアメリカ空軍所属の長老派の若い信徒で、日本人の学校で働くことを希望していました。スマイス夫人は、ある牧師の要請で、彼女のために金城女学校で週に16時間、月額33ドル、つまり同じ仕事をしている日本人教師と同じ給料で英会話を教える仕事を持ってきました。ミス・ゴボーニは喜びました。彼女はいろいろな形で学校生活に関わるようになりました。みんなでタフィー【砂糖・水飴と水を合わせて高温で煮詰め、ナッツなどを加えて固めたキャンデー：訳者注】を作るタフィー・パーティの開くため女学校の生徒たちを自宅に招き、アメリカ人の奇妙なやり方を実演しながら、キリスト教会の親しみやすさと関心を示したのです。

人事異動でミス・ゴボーニが女学校を去らなければならないことが決ま

ると、すぐさま学校の関係者は嬉しそうにリクエストを携えてスマイス夫人のところへやって来ました。「ミス・ゴボーニのような、別のお嬢さんを送っていただけますか？」不思議なことですが、スマイス夫人にはそれができたのです。別の女性は、ミス・ゴボーニが名古屋の空軍での牧師助手を務める神学生の生活を離れる直前に現れました。彼女は看護師でした。忙しいことに慣れていて、クリスチャン・スクールに喜んでそのエネルギーを注いだのです。

2. 普通の才能による宣教

メリー・スマイスの宣教の根底にあった基本原則は、「自分が置かれた状況でできることをする」というものでした。スマイス夫人は宣教師になるつもりはありませんでした。彼女には劇的な召命というものはありませんでした。「なぜ日本、あるいはアフリカ、あるいはブラジルに行くことにしたのですか」と尋ねられた時、女性宣教師の多くが、正直のところ、「配偶者のジョンが行くから」と答えなければなりません。

メリー・スマイスが日本にやってきたのは、チェヴィス・スマイスが日本にやってきたからです。1913年、メリーはフィリピンへの旅に出かけました。翌年の夏、そこから日本へ行きました。それは彼女の従姉妹のハリ・マイヤーズとチャールズ・A・ローガンの最初の妻、パティ・マイヤーズ・ローガンを訪ねるためでした。これらの従姉妹は、二人とも、それぞれ1897年と1902年、ミッションによって任命された、日本における外国伝道局理事会の政治家然とした代表者でした。彼女たちを訪問している間、メリーは東京からそれほど遠く離れていない、美しい山間の保養地・軽井沢で、チェヴィス・スマイスと出会いました。そこでは多くの宣教師たちが必要な休暇を過ごしていました。わたしは、後に、メリーとチェヴィスが休暇のために建てた家に彼女を訪問したことがあります。

メリーは若い頃をバージニア州で過ごしました。イースタン・シオアで

生まれ、少女時代はわたしの父（H・ヘンダーライト牧師）が主宰する私立学校の生徒でした。わたしの父は、多くの若い説教者たちがそうであったように、その宣教の初めを、あの古く有名なマケミー長老教会、長老派主義がバージニア州でその最初の宣教を始めたアコマックにある教会で始めました。後に、メリーはメアリ・ボールドウィン・セミナリーとランドルフ・メーコン・カレッジを卒業しました。それから日本訪問も含むフィリピンへの旅行をして、彼女の生涯は教会の宣教師の働きへと向けられたのです。

1916年、メリーとチェヴィスは結婚し、豊橋での福音宣教師として、日本に戻りました。翌年、二人は日本で三番目に大きな都市、そして仏教の拠点でもある名古屋に異動し、金城女学校、「少女たちのための黄金の城の学校」の職員に加わりました。金城は、二人の宣教活動の間、主として二人の知恵と献身によって、世界で最も知られたキリスト教教育の教育機関の一つとなるのが運命づけられていたのです。金城は、1888年、アニー・ランドルフ夫人によって、ほんの一握りの少女たちと共に創立され、二人が教員に加わる頃には200人の生徒を有する高校へと成長していました。優秀な日本人教師の市村與市氏は、校長の地位に昇格するところでした——それは大きな不安と反対意見を伴った宣教政策における大きな賭けでしたが、将来の学校の歴史においてその有効性を証明することになった施策でした。

この学校の教職員の一人になりたいというスマイス氏の意欲には並々ならぬものがありました。日本人校長の下で働かなければならず、そのことは、時にはアメリカ人にとっては難しいことでした。しかも、彼は二人が学校当局者の目に望ましい夫婦と映ったのも、実は妻メリーの音楽教師としての証明書が音楽科の設置基準に必要であったことを知りながら金城に行ったのです。二人は行きました。彼女は音楽科の名ばかり学科主任として、彼は聖書と英語の教師として。

スマイス夫妻と市村校長はとても息の合った素晴らしいチームでした。市村氏は仏教徒で、仏教を建学の精神とする学校で倫理学を教えていました。彼は教会の宣教師の一人、ロバート・E・マカルピン氏が、日本の高校教師のために、純粹に仏教とキリスト教の二つの宗教を比較研究する目的で開いた英語の聖書研究会に来ていました。マカルピン氏の指導のもとで、彼はクリスチャンに改宗し、日本におけるキリスト教教育の力強い勢力となり、35年間、校長として金城に奉仕しました。彼は金城が四年制大学、短大、高校、中学校の合計三千人の学生・生徒を抱える強力な学校に成長するのを見届けたのです。彼の生存中、金城はテネシー州メンフィスにあるサウス・ウエスタン大学の提携校となり、1950年、市村先生自身は同大学から博士号を授与されました。

スマイス夫人は、多くの宣教師夫人がそうでしたが、日本へ派遣される宣教師に要求される通常二年間の日本語訓練の機会がありませんでした。その代わり、彼女は個人教授の先生と一緒に日本語を勉強しました。彼女の経験からこの方法は非常に満足のいく方法であると思います。スマイス夫人は日本語を上手に活用しました。日本語を読むことができましたが、決してスラスラとはゆかず、彼女が日本語を書くのを見たことはありません。彼女の話す日本語には、確かにはっきりとした個人的な味わいがありました。良い日本語、役に立つ日本語でした。わたしは何度も目にしました。驚きの表情が相手の男女の顔を一瞬横切ったかと思うと、微笑みが浮かび、そして言うのです。「彼女は日本語がうまい！」と。わたしはいつも思いました。それは独特の日本語であり、いつも微笑みをもたらすものであると。話す相手が誰であれ、相手に敬意を表すために、真心をこめて日本語を話したという事実が、彼女の日本語を常に和解の仲立ちにしたのではないかと思います。彼女は自分が言いたいことは何でも言うことができました。彼女は礼儀正しく、上品に日本語を使うように注意しました——伝統的な日本のお辞儀をする場合と同じように。その言葉を使ってい

る日本人に対する尊敬の念を込めて使ったのです。

3. 人々との一体感

尊敬の念を込めて使うことは彼女の所有物に関しても同様でした。すべての若い宣教師——そしてアメリカ本国にいる多くの宣教師たち——が、熱く論じている大問題の一つは、宣教師の本国での生活水準と彼らが派遣された国の人々との間の生活水準の問題です。宣教師は日本の家に住むのでしょうか。宣教師は日本人の同僚よりも多くのお金を使うのでしょうか。日本人が生活するように生活し、日本人の服を着て、日本人の食べ物を食べるのでしょうか。自分が奉仕する人たちと自分を一体化するということはどういうことなのでしょうか。

これらの問いに対するメリー・スマイスの答えは明白でした。そのことに関しては彼女は活動の大部分で首尾一貫していました。「わたしは宣教師の仕事を助けるために文明の恩恵を用いるのは良いことだと信じています」と彼女は言いました。「自分たちと自分たちが共に生きている人々との間の壁を高くすることのないように西洋式の優れた利点をあきらめなければならぬと考えている人々は、普通、断念しなければならないごくわずかの事柄を選び出し、生きるためには他のものにしがみつかなければならないと思っています」。これこそメリー・スマイスの宣教の最大の特徴だとわたしは思います。彼女にはナンセンスなところはありませんでした。彼女の人生にはわざとらしいものは何もないのです。彼女は壁となっていたであろう所有物を取り上げ、より大きな奉仕のための手段、和解のための資源としたのです。

わたしが彼女と暮らしていた頃、彼女は素敵な家、日本家屋を所有していました。床と浴室と台所は西洋風に改築されていました。二人の宣教師が三つの寝室を所有していたことに対しては批判があったかもしれませんが、しかし和解という目的のために、あれほど首尾一貫して用いられた空

間を見たことはありません。彼女は名古屋市全体の「クリスチャンの来客用寝室（ゲスト・ルーム）」と判明することになる空間を持っていたのです——そして、もてなし、楽しませなければならぬ来客が驚くほど、次々とやって来たのです。スタンレー・ジョーンズ [アメリカ合衆国のメソジスト派の宣教師。インドで活躍し、その経験を元にアシュラム運動を始めた (1884-1973) : 訳者注] とミュリエル・レスター [イギリスの社会改革者、平和主義者、ユニオン・チャーチの教会員 (1883-1968) : 訳者注]、それぞれが通訳を伴って世界中を遊説していました。他には、日本基督教団のために訪問伝道訓練運動で米国キリスト教会協議会から派遣された牧師、教会の働きのための名古屋にいる著名な日本人牧師たち、公務で派遣されているわたしたちのミッションや他のミッションの宣教師たち。いつ、何時、電話が鳴るかも知れず、それがスマイス夫人に一晚の来客の世話をするように依頼する地元の牧師の一人からの電話であるかもしれないのです——彼女は対応しました——このことはわたし自身の一年間の日本滞在を、キリスト教会の真の生き様を垣間見ることになる栄光の一瞥に変えた事実です。

しかし、訪問者は教会の高位の訪問者だけではありません。そこで大歓迎されたのは結核病院から退院したばかりで一週ぐらいは栄養価の高い食事を必要としていた病気の日本人少年、あるいは最後の親族も失って人生に新たな展望を必要としていた少女。この宣教師の自宅に「預言者の部屋」[列王記上 17:19 : 訳者注] が存在してはじめて可能となったおもてなしには際限がありませんでした。

しかし、スマイス夫人の和解のために奉仕に貢献したのは来客用寝室だけではなくではありません。家全体と彼女の所有物のすべてが同様のやり方で動員されました。ややこしい問題を抱えてスマイス夫妻の自宅へ助けを求めにやって来る高校の校長先生との会談に間に合わせるべく彼女の居間から聖書研究会が片付けられるのを見ました。全国のキリスト教学校教育同盟に

加盟している高校が、金城に集結するために名古屋にやって来て、彼女の素敵な家で開かれたレセプションでアメリカの料理とアメリカのおもてなしを味わうのを見ました。またそこで日本の結婚式を見ました。

しかし、彼女の自宅の最も典型的な、またおそらく独得な使い方は彼女がそれを教育のために使ったことです。スマイス夫人は、音楽科の名ばかりの主任としてはもはや必要とされなかったので、家庭科に異動しました——再び、自分が必要とされるところで自分にできることをする覚悟はできていました。今度は西洋料理でした——新しい、そして異例の和解の仲立ちでした。「なぜ西洋料理を？」とわたしは尋ねました。「それは日本の女子には不要な贅沢というものではないでしょうか？」全然、違います。家庭科の教師として、彼女たちはそれを必要としています。さらに、妻として、それを必要としています。余裕さえあればどんな日本人家庭でも今ではアメリカ風の食事をそのメニューに加えるでしょう。そのようにして、スマイス夫人は西洋料理を、生徒にとって並外れた価値ある経験をするチャンス、そしてイエス・キリストの福音を広める方法としたのです。

彼女は自分の家を、ある種の生きた「学びの場」に変えました。「それはわたしだけができることでした」と彼女は言いました。彼女は一度に四人の生徒を、夫妻の自宅に一泊させ、西洋式の生活を直接に見させるために招待したのです。彼女たちは午後四時にやって来ると、夕食のテーブルをセットし、料理が調理されるのを見て、テーブルで給仕したものです。彼女たちはシーツや毛布できちんとベッドメイキングをして、アメリカ風に快適に眠り、そしてアメリカ式の朝食をとりました。戦後、クラスが増えてこれを続けるには大きくなりすぎても、それでも彼女は一度に30から40人の生徒を招いて、家屋や家の中を、ベッドメイキングを、夕食が調理されている台所、そしてテーブルに銀器とリネンと洗練された西洋の陶器がセットされるのを見せたのです。

「西洋文明を広めるのが教会の仕事ですか？」と尋ねられるかもしれま

せん。「キリスト教を西洋風の理解や西洋風の添加物から切り離すことだけでも難しいというのに、何もわざわざ西洋風の生活を教えることを買って出なくても。スマイス夫人、あなたはキリスト教を何だと考えておられるのですか？ どうして伝道に時間を費やさないのですか？」

実際、どうしてなのでしょう。伝道とは一体何なのでしょう。またどうやってなされるものなのでしょう。

4. さまざまな形での伝道

「宣教事業のキリストの証しは、教会であろうと学校であろうと、目に見える建物を越えたものです。それは宣教師一人ひとりの生活と活動です。宣教師の数だけ、いな、それ以上に、伝道の方法はあるのです。」(ジェームズ・A・カグスウェル『夜が明けるまで』原書104頁／邦訳138頁)

1916年、スマイス夫妻が豊橋に行ったのは福音宣教師としてでした。1947年、スマイス夫人が名古屋に戻ったのは伝道者としてでした。それは、戦後の日本に戻った最初の長老派教会の宣教師の一人としてでした。1917年、金城での仕事を引き受けるために豊橋を後にした時、彼らの出立は伝道の使命の放棄ではありませんでした。教えることは、夫妻にとって、それが音楽であれ西洋料理であれ、あるいは英語であれ聖書であれ、人々の人生にキリストの衝撃を与える機会となりました。就職の斡旋から結婚相手の選択まで、それはあらん限りのすべてのことに及んだのです。

学校での仕事に加えて、近くの工場や洗濯場へ定期的に訪問することがありました。そのいずれの奉仕においても決まった時間が確保されていました。日本へ帰国した引揚者でいっぱい住宅団地に住んでいる母親たちのための聖書研究会がありました。また矯正院の男子たちのための別の聖書研究会もありました。

「わたしはこのお話を皇后陛下にしました。どんな仕事を自分ができるかを説明するためにです」と彼女は言いました

ある日、牧師夫人のグラハム夫人が「士官の妻たちの会」の社会事業部の秘書としてやってきて、日本の戦争未亡人たちに70～80ドルを提供したいと申し出ました。メリーはすぐさま70人の女性と149人の子どもたちの住んでいる「引揚者収容所」のことを思いました。そのお金を最大限に活用したいと願い、「これら母親たちは何を必要としているのでしょうか？」と、スマイス夫人は監督者の許に行きました。彼女たちに相談をもちかけると、全員が何よりもシチュー鍋を欲しがっていることがわかりました。スマイス夫人はグラハム夫人と一緒に70個のシチュー鍋を買うために問屋に出かけました。それらはすぐに引揚者収容所に届けられたのです。

しかし、それでは不十分でした。贈り物は与えられ、受け取られて初めて成立します。受け手には感謝する相手が必要です。関係する人は贈り物そのものよりもはるかに重要です。そのため母親たちが家にいる夜八時に集会が開かれました。名前が読まれて鍋が与えられました。スマイス夫人は、この機会を利用して、いつも彼女が言っているように「為になる分かりやすいキリスト教の話」をしました。すると母親たちの代表者が立ち上がり、母親たちの感謝の意をグラハム夫人に伝えたのです。

「昨年のクリスマスには」スマイス夫人は言いました。「アメリカの友人から日本の友人へ600ドルが贈り物としてわたしの手を通して行きました」

福音伝道のためになされる英語の聖書研究会も同様の機会でした。ある宣教師たちはそれらを重要ではないと考えていますが、メリー・スマイスは、それこそ宣教の最も単純な形態であり、従って他者と実りある交わりをするための最良の方法だと考えました。週に一度、15人から20人の若者があなたの自宅や教会に集まるとしましょう。これに41年を掛ければこの宣教師の奉仕が与えた衝撃の度合を正しく評価することができるでしょう。彼らが聖書よりも英語を求めてやって来るとしましょう。一年も経たないうちに銀行業務に必要な英語を勉強するためにやって来ていたはずの

青年がこう言うようになるのです。「どちらの教会に通っておられるのですか？ わたしも一緒に行きたいのですが」

時には、子どもの頃にスマイス氏の聖書研究会に通っていた男性が高校生の息子をスマイス夫人の研究会に入れようとして言うのです。以前、この子の兄は彼女の研究会にいましたが、いまは牧師になることを考えていますと。

別の男性は、彼女の聖書研究会にいたものの、結局、教会につながることはありませんでした。しかし、スマイス夫人が日本を去る準備をしていた頃にふらりとやって来て、彼女に別れを告げるとワッと泣き出しました。彼にとって多大の意味を持っていた人生の一時期を彼女が表現していたからです。彼女が言うように「わたしは彼にとって教会との唯一のつながりでした」。別れ際、彼女は大いに気懸りであった質問ができました。「あなたがここで見つけたことを今度はあなたの息子さんたちが見つけるために、あなたは何をしているのですか？」

「伝道形態はさまざまでも、その根底にあるのはすべて同じ単純な条件です——理解しようとする心、キリストに対する情熱的な献身のような人々に対する深い愛、神の恩寵を純粹に経験すること、祈りにおける神との親密な交わり、神の福音の忠実な説教、神の栄光をそこかしこで輝かせる生涯です」(C. ダービー・フルトン『東方の星』124頁)

5. スマイス氏の宣教

「日本における宣教師の目的は教会を建てることであることを忘れてはなりません」。この言葉はスマイス氏の勧告であり、日本宣教（ジャパン・ミッション）において、リーダーシップを発揮した彼の深い知恵を解明する手掛りです。わたしはスマイス氏の多くの友人と彼の妻の温かい思い出を通してしかスマイス氏を知りませんが、スマイス夫妻が共に過ごした歳月の共同宣教について多くを学びました。市村博士がスマイス氏について、

またスマイス氏が金城のためになした支援について話すときの恭しい話し方。スマイス氏が亡くなる直前、文化と教育面での働きに対して天皇陛下から授けられた藍綬褒章。彼の妻が日本にいた間、その家を訪問し続けた無数の人々——感謝の言葉を携え、両腕に一杯の贈り物を携え、自分では解決できない問題を携えてやって来た人々。これらすべてがスマイス氏の日本に対する貢献の証拠でした。わたしは、スマイス氏の妻について明言したように、スマイス氏について断固として明言したいのです。スマイス氏の宣教の特徴とは聡明な知性や非凡な常識と一体となった謙虚で上品な精神であると。

金城が現在のようなすぐれた学校になることを可能にしたのはスマイス氏のビジョン（将来を見越す力）、わたしたちの教育機関を強力な日本人指導者の管理下に置くことの重要性を認識したビジョンでした。「極めて重要な事柄です」と、1930年にまでさかのぼれる『年次報告』には書かれています。「一つの学校が、約百万人の魂の住む大都市で、最大の福音勢力として描写されているのは。しかし、これが金城大学の評判なのです」。スマイス博士はイエス・キリストの奉仕のために日本にいたのであって、自分自身のために、また自国のために栄光を求めることはなかったからです。一人の人間が、その献身の一生の間に、何を成し遂げることができるかなどと評価することは不可能です——その人物が誰が功績を認められるかということに対してはまったく無頓着なのですから。

1939年の夏、スマイス氏は心臓疾患で病気になる、同年12月にチャールストンに戻り、1941年2月21日に亡くなりました。その後、6年間、スマイス夫人はチャールストンで生活を続けていましたが、1947年の9月、日本に戻ることに became したのです。

6. 日本への帰還

スマイス夫人の日本帰還の経緯は、それ自体が彼女の宣教に対する賛辞

となります。1945年10月、戦争が終わるとアメリカ政府から和解の目的のために四人の人物が大使として日本に派遣されました——ダグラス・ホートン博士、ジェームス・C・ベイカー主教、ウォルター・W・ヴァン・カーク博士、ルーマン・J・シェイファー博士の四名です。彼らは日本の多くの都市でキリスト教界の指導者たちと会談しました。名古屋での会議の一つが金城の爆破された建物で開催され、これら四人の人物の報告書には、ガラスがすっかり壊された窓、破壊された町、そして彼らが会談した「立派なキリスト者の校長」が言及されています。大戦中、日米の友人間での手紙のやりとりは不可能でした。しかし、この最初の機会を利用して、市村氏は——もちろん彼こそ「立派なキリスト者の校長」に他なりません、これらの大使にスマイス夫人宛の手紙を手渡したのです。彼女がいつでも大歓迎であることを請け合せて、日本に戻ってきて仕事を再開することを促す旨の手紙でした。しかし、手紙の宛名には正しい住所が記載されておらず、また名前が似通っていることもあって、手紙は間違っって米国南長老教会外国伝道局のジョン・コベントリー・スミスの許に配達され、1946年1月まで彼の机の中で眠っていました。やがて、彼はそれが自分宛ではなく、実はスマイス夫人宛の手紙であることがわかってきました。彼は手紙をサウス・カロライナ州チャールストンに送りました。スマイス夫人は、すぐさま日本へ戻る許可を委員会に申請しました。

米国南長老教会外国伝道局は、当時、二人の宣教師、ウィル・マッキルエンとジェームズ・マカルピンの帰還計画を立て、教会の仕事を再開する可能性について調査していました。ラードナー・モーア氏は、戦時中アメリカ軍に勤務していたので、すでに日本にいました。フルトン博士はすぐさまマーガレット・アーチボルドに手紙を書きました。彼女はミシシッピ州立女子大学で学生相手の仕事をしていたのですが、彼女にスマイス夫人と一緒に日本に戻るよう誘ったのです。パスポートの確保には多くの面倒な手続きがありました。新たな出発のためにはあらゆる種類の補給が必

要だったのです。少なくとも1年間は持つだけの食物を集める必要があります。彼らはフォード車に乗ります。スマイス夫人は言いました。「免許を取得するのは最高の時間でした！」学校の秘書に伴われて、彼女は市交通局を往復しました。1日に14の異なる部署を訪問しました。パスポートというたった一つの品目を手に入れるためにです。スマイス夫人とマーガレット・アーチボルドは、戦後、名古屋に入った最初の宣教師でした——実際、米軍とは無関係の、名古屋で暮らすために戻ってきた最初のアメリカ人でした。戦争中、二人のアメリカ人が名古屋には住み続けていました。

わたしが「和解の使者」としてメリーが働いているのを見る機会を得たのは戦後のまさにこの時期のことでした。彼女と共に暮らした一年間、彼女が従事していたさまざまな活動は、世界で働く教会が注目すべき生き生きとしたイメージを提示してくれました。この宣教について、彼女自身の言葉がわたしの提供できる最善の説明を提供するものです。「わたしが宣教師であることを知ると、日本人はわたしにやって欲しいことを何でも自由に頼みました。もちろん、いつでもそれに応ずることはできませんでしたが、できることならいつでも喜んでしたのです」

どれくらいの頻度で彼女が人々のために応じたかは、彼女が日本で得た多くの友人によって、また彼女の長い、実り豊かな宣教の終わりに日本を去る時に彼女に与えられたパーティーやプレゼントの数によって知ることができます。名古屋で親交のあったすべての宗教、及び市民クラブは、彼女のためにそれぞれに送別会を開きました。何百というさまざまな贈り物がありました。彼女が日本を出航する直前、家族や友人に書いた手紙にはこう書かれています。「人々はわたしにたくさんのお別れのプレゼントをくださいました。お隣の副知事の奥様からの屏風をはじめとして、大きな七宝焼きの花瓶、古い版画や絵、漆や茶碗、小さなおもちゃ、果物や卵に至るまで。食料以外はすべて貨物便でチャールストンに向かっています」

送別会は、ロータリー・クラブ、アメリカ領事館、金城の卒業生のお別

れパーティーから、学校のすべての学科主催のより小さなお別れ会まで、さまざまでした。おそらく最も念入りなお別れ会は「日本基督教婦人矯風会」、アメリカのキリスト教婦人禁酒協会に似た組織によるもので、これは彼女の親友はもちろんのこと、知事、市長、そして名古屋市職員による公式のスピーチがありました。それは出席者約250人の正餐でした。牧師の連合、YMCA、YWCA、名古屋市の健康福祉課も含めて、名古屋のあらゆる組織の人々が参加したのです。パーティー全体がTV放映され、日本中で放送されました。それはそれは華やかな行事の一時でした。それはある南長老教会の宣教師が彼女について言ったことの妥当性を証明するものでした。「スマイス夫人は、他の誰よりも多く、名古屋の人々を知っています」

7. 天皇からの勲章

スマイス夫人に対する最も重要で、確かに最も並々ならぬ賛辞、そして日本のための彼女の貢献に対して形をとったものが、彼女に与えられた国家的重要性を持つ二つの勲章でした。最初のもは、1951年、愛知県の新聞社が地域社会全体への優れた奉仕に対して彼女に勲章を贈りました。もう一つは、日本政府からの褒章、メダルと賞状で、国全体への多大な貢献を認められ授与される「勲五等瑞宝章」として知られるものです。それは名古屋を去る前日、知事からスマイス夫人に渡されました。

数日後、聴衆の見守る中、彼女は皇后陛下から東京に歓迎され、そこで謁見の榮譽に浴しました。二人は約20分間日本語でおしゃべりをして、その会談の間、皇后陛下は、スマイス夫人の名古屋での働きについてお尋ねになり、個人的に彼女が日本で過ごした年月と日本人に対する貢献に対して感謝されました。

この勲五等瑞宝章は日本政府からかつて外国人に与えられた最高の勲章の一つであり、事実、非常に高貴な勲章です。スマイス博士とスマイス夫

人の他には南長老教会のもう一人の宣教師だけがこの特別な名誉を授けられています。ハンセン病に尽力した韓国のR. M. ウィルソン博士です。

この女性が日本のキリスト教会の働きにどれほどの貢献をなしたか、正しく評価することは不可能です。ただ彼女の無私の奉仕によって、彼女が触れた人生について、南長老教会の日本伝道の危機の時にあって彼女が及ぼした恵み溢れる影響について、思いめぐらすことができるだけです。そして彼女の働きは主の招きにふさわしい和解のための奉仕であったと知るのであります。というのも、教会が世界に対して主の働きを最もよく遂行することができるのは、相手が誰であろうと、何処であろうと、その要求を満たすために、静かに控え目に働く時だけなのですから。

外国伝道局 米国南長老教会 教育部
テネシー州ナッシュビル 私書箱330号

[解説]

金城学院の母：メリー・スマイス

1889年、海の向こうのフランスでは、パリのシンボルとなるエッフェルが聳え立ち、パリで万国博覧会が開催されていた。パリ万博は人類史に「自由・平等・博愛」の精神をもたらしたフランス革命の端緒となったバスティーユ襲撃百周年を記念する一大イベントであった。ちょうどその頃、名古屋の地では、4人の宣教師教員と3人の少女による「金城学院のあゆみ」が始まった。そのあゆみを始めたのは神である。今年、2019年、金城学院は創立130周年を迎える。その創立は、後の歴史が証明するように、日本における福音主義に基づく女子教育の重要性を証明するものとなるべ

く神の摂理によって運命づけられていた。創立130周年を記念する学院のHPのスペシャルサイト「金城学院ものがたり」では、三人の女性宣教師の生涯が特集されている。名古屋に女子教育の種を蒔き、金城学院の基礎を築いたアニー・ランドルフ（1827-1902）。厳しさと優しさをあわせ持ち、学院と生徒の成長に人生をかけたエラ・ヒューストン（1864-1912）。そして本稿のヒロイン、メリー・スマイス（1890-1979）の三人である。

メリー・スマイス。軽井沢にある保養施設スマイスハウスのホールで目にする一対の肖像画の右側の人物で、見る者に安心感を与える御婦人である。今回の翻訳は、その微笑の人物に関する未邦訳の第一次資料、すなわちレーチェル・ヘンダーライトが著したメリー・スマイスのスケッチ、『和解の奉仕者：日本派遣宣教師 メリー・フレッチャー・スマイス物語』（Rachel Henderlite, *Minister of Reconciliation: The Story of Mary Fletcher Smythe, Missionary to Japan*, 1950）の全訳である。

このスケッチの冒頭にもあるように、日米間の戦争のために帰国を余儀なくされていたメリー・スマイスが、大戦の終わった秋、著者のヘンダーライト（Rachel Henderlite, 1905-91）の自宅の居間で語らいの時を持ったことが、このスケッチ誕生のきっかけとなったのである。ヘンダーライト自身も、69年前の1950年9月8日、南長老派ミッション（米国南長老教会外国伝道局）から金城に派遣された教育宣教師として、一年間、客員教員として日本に存在した。メリー・スマイスの身近で、本人を直接に知る人物の手になる記録であるがゆえに、短いながらも、このスケッチの重要性はいくら強調してしすぎることはない。本文にもあるように、彼女はスマイス夫妻宅に寓居し、その宣教活動を目の当たりにし、文字どおり「金城学院のあゆみ」の目撃証言者となったのである。ヘンダーライトに関しては、『金城学院百年史』にも肖像写真とともに紙面を割いて特筆されている（511-13頁）。「彼女の功績によって、英文学部の教職課程設置が認可されたといっても過言ではない」（513頁）とあるように、単なる歴史の目撃

レーチェル・ヘンダーライト著『和解の奉仕者：メリー・F・スマイス』

者ではなく、「金城学院のあゆみ」においてひとかたならぬ功績を残した重要人物であったことは言うまでもない。

事実、ヘンダーライトは『ウィキペディア』でも詳述されるセレブ（著名人）である。

レーチェル・ヘンダーライト（1905.12.30 - 1991.11.6）はアメリカの宗教指導者。PCUS（米国南長老教会）で牧師職に任命された最初の女性で、アメリカ国内のいくつかの大学や神学校で教授職に就き、6冊の著作がある。さまざまなエキュメニカルな活動に積極的に取り組んだ。その関係文書はペンシルベニア州フィラデルフィアのある「米国長老教会歴史協会（Presbyterian Historical Society）」に保存されている。

また「米国長老教会歴史協会」のHPにある“Women’s History: Rachel Henderlite”には、レーチェル・ヘンダーライトが金城学院大学の姉妹校、アグネス・スコット大学の卒業生であることが特筆され、卒業時の記念写真が掲載している。



『アグネス・スコット大学年鑑、1928年』
（出典：“Women's History: Rachel Henderlite.”）

ヘンダーライトに関する最重要の情報源はMcCarthyの“Rachel Henderlite”である。そこには『金城学院百年史』の肖像写真のイメージとはまったく異なる、若き日のヘンダーライト肖像、彼女が金城学院に派遣された当時の肖像写真がある。



Rachel Henderlite 1944-60

(出典：ATS-PSCE Centennial atspscecentennial.org)

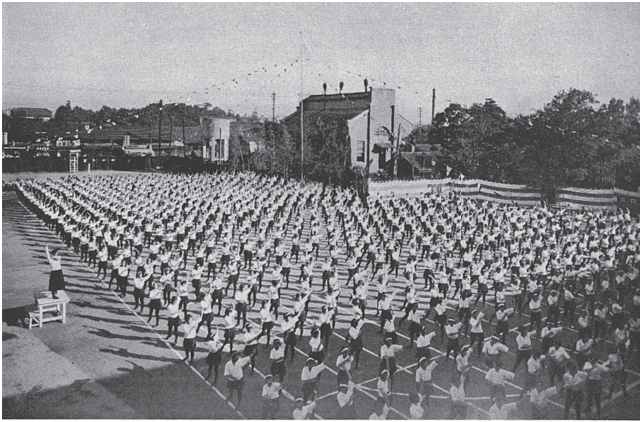
また、わたしたちがヘンダーライトと金城学院との具体的な関わりを知ることになるのはこの記事においてである。その一節には次ようにある。

戦後のある時点で、米国南長老教会総会神学校（ATS）で教えながら、彼女はミッション（外国伝道局）の招聘により、日本にある金城大学（Kinjo College）の客員教員として1年を過ごした。疑う余地なく、大戦直後の日本の社会・経済状態が、彼女の同情心と正義感に働きかけたに違いない。彼女は、日本人の生活様式と上品さ、また日本文化を心から楽しみ、正しく評価するようになった。（McCarthy）

故真山光彌教授は『金城を支えた人々』のなかで、メリー・スマイス

を「金城学院の母」(8頁)と呼んだ。当時の校長・市村與市を物心両面で支えたメリー・スマイスがいなければ現在の金城はなかったであろう。しかし、メリー・スマイスの働きを過小評価してはならない。ヘンダーライトが指摘するように、彼女の愛の働きは金城学院だけに留まるものではないからである。メリー・スマイスを理解するために必要な、ヘンダーライトが提示するキーワードは「和解」である。このスケッチのモットー(書物の巻頭に引用した題字)として、ヘンダーライトは「第二コリント」の一節を引用して、彼女を「和解の任務のために奉仕する者」(共同訳聖書、5:18)、すなわち「和解の奉仕者(Minister of Reconciliation)」と呼んだ。全部で16頁からなるこの小冊子で、「和解」という語は、表題も含めると26回も使われている。それは名古屋に住む日本人に贖い(神との正しい関係)をもたらすために、メリー・スマイスがその小さな腕を伸ばし(彼女がいかに小柄な人物であったかは次々頁の写真を見られたい)、愛の働きを全うしたというのがヘンダーライトの含意である。神によって日本に派遣されたメリー・スマイスは、「キリストの使者」(同書5:20)、「福音の使者」(エフェソ6:20)であった。「金城学院の母」であるばかりか、メリー・スマイスは、相手がクリスチャン、ノンクリスチャンの如何を問わず、「名古屋の母」でもあったのである。

最後に一言。学院創立130周年の記念の年にメリー・スマイスの未邦訳のスケッチを翻訳し、同時に、これまであまり知られることのなかった学院の創立記念日を語る2枚の写真(運動会の写真と学院創立60周年記念の集合写真)を紹介できることは望外の喜びである。メリー・スマイスの1953刊行の小冊子『フレンズ』(共著者はスマイス博士と市村與市)と併せて、ヘンダーライトのスケッチは、メリー・スマイスという人物がキリスト・イエスに捕らえられ、他者のために生きるべく、その持てるものすべてを与えた「キリストにある創造と和解」(コロサイ 1:9-23)の実践者であったと実感させる一冊なのである。



Exercises on Founder's Day at Golden Castle College

金城学院大学・創立記念日の体操（西暦は不明）
（出典：Fulton, *Star in the East*, 1938）



金城学院60周年記念写真（1949年10月）
前列中央がメリー・スマイス。後列に市村興市校長（「金城学院中興の祖」）と
マーガレット・アーチボルド女史（「スマイス寮の母」）の姿が見える。
（出典：The National Archive of PC [USA] Presbyterian Historical Society）

[参考文献]

- Cogswell, James A. *Until the Day Dawn*. Board of World Missions, Presbyterian Church U.S, 1957 (邦訳：ジェームズ・A・カグスウエル『夜が明けるまで—南長老派ミッションの宣教の歴史』真山光彌・浅若 佐・西田スエ子共訳, 東京：新教出版社, 1991)
- Fulton, C. Darby. *Star in the East*. Richmond, VA.: Presbyterian Committee of Publication, 1938.
- Henderlite, Rachel. *Minister of Reconciliation: The Story of Mary Fletcher Smythe, missionary to Japan*. Nashville, Tenn.: Board of World Missions, Presbyterian Church in the U.S., 1950. Retrieved from <https://archive.org/details/ministerofreconc00hend>
- Smythe, Mary Fletcher, Yoichi Ichimura and Langdon Cheves McCord Smythe, *Friends*. Nagoya: Tousaki Printing, Co., 1953.
- 真山光彌. 『金城を支えた人々』名古屋：金城学院大学キリスト教文化研究所, 1995.
- 金城学院百年史編集委員会編. 『金城学院百年史』名古屋：金城学院, 1996.
- “Langdon Cheves McCord Smythe and Mary Fletcher Smythe Papers (1883-1972).” Call Number: RG 467. Retrieved from <https://www.history.pcusa.org/collections/research-tools/guides-archival-collections/rg-467>
- “Rachel Henderlite.” *Wikipedia, the free encyclopedia*. Retrieved from https://en.wikipedia.org/wiki/Rachel_Henderlite
- McCarthy, Estelle Rountree. “Rachel Henderlite.” Talbot School of Theology website. Retrieved from <https://www.biola.edu/talbot/cc20/database/rachel-henderlite>
- “Women’s History: Rachel Henderlite.” Presbyterian Historical Society website. Retrieved from <https://www.history.pcusa.org/blog/2015/03/womens-history-rachel-henderlite>